



梅木だより

令和2年度

令和2年5月11日

教育目標 やさしく かしこく たくましく

No. 2



「保」から「褒」へ

校長 傳田 学

新型コロナウイルスの感染拡大を押さえるため、緊急事態宣言が全国一律に5月いっぱい延長とされたことを受け、臨時休業期間が延長となりました。教職員もほぼ自宅勤務とならざるを得ない状況ですが、子どもの学習保障のための十分な教材作成や環境整備を行いつつ、6月からの学校再開を心から願っています。

さて、私自身2児の父であります。 「保護者が子にしてあげること」について考えることがあります。「躰をし、将来困らないように学習や生活習慣、道徳的な判断力などを身に付けさせること」が保護者の役割だと思います。しかし、そのために「具体的に何をやる」という自身の行動イメージはなかなかもてないものです。

最近読んだ記事に、保護者の「保」の漢字の成り立ち等の記載がありました。訓では「たもつ」の他に「やすんじ(ず)る」とも読み、『人(親)が子ども(乳児)をおむつで取り巻いて大切に守るさま』からできた漢字です(※ちなみに、にんべん(人)のない「呆」の漢字は、『人から放置された乳児が状況を理解できずぼんやりしている様子』を表します)。保護者とはまず、子に深い関心を持ち、子の生命を大切に守る存在であると言えます。

もう一步踏みこみ、「褒(める)」の漢字を見てみます。この漢字は「保」を「衣」が上下から挟んでおり、大切に守る子を更に衣で包み込む状態を意味します。『乳児をゆったりと懐に抱いているさま』を表した漢字であり、そこから「広くゆるやかなさま」、更に「よいことを賞賛する、ほめる」の意へとつながりました。この漢字の成り立ちは、保護者が子のすべてを受け入れ、柔らかく抱き続け、成長させていくためには、実際に「褒める」という行為が欠かせない、という大切なことを我々に教えてくれているように思えます。

一般的に人は、他人のよくない特性や習慣には非常に敏感に反応しますが、他人が身に付けているよい特性や習慣に対しては特に反応しないものです。大人が子どもの「普通にしているよいこと」を見付け、正しく認め、「褒める」行為を継続できれば、正直で素直な子どもに成長します。「貸してあげられて優しかったね」「いつもくつを揃えて脱げてえらいね」「集中して30分勉強できて立派だね」など、子を褒められる行為は至る所にあります。本当にできていることを具体的に褒めることがポイントです。

「保つ」保護者から「褒める」保護者へ。一日ひとつ「子どもを褒める」ことを積み重ね、子の心身の健やかな成長を願い、愛情を注いでいきましょう。

この学校便りの裏面に、「東京都北区立梅木小学校 Grand Design 2020」を載せています(カラー版PDFは本校ホームページに掲載してあります)。本校の教育目標達成のために、保護者、地域の皆様は欠くことのできない大きな柱です。目指す子ども像を共有し、子どもが日々成長することができるよう、本校の教育活動への積極的な参加をお願いいたします。

